

深田久彌●山の文学全集

わが愛する山々

80
ア

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

朝日新聞社

深田久彌●山の文学全集 III

わが愛する山々



深田久彌・山の文学全集 Ⅲ

わが愛する山々

全十二巻・第一回配本

一八〇〇円

発行 昭和四十九年三月二十一日

著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shigeko Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集
III

目次

山さまざま.....九

湯沢の一年

子供連れの谷川岳

高原哀愁

スキー・ヒュッテ

山の本

剣岳

山行の服装

ルックザックの中味

国体鳥海山登山

十一月の山

疎開スキー

薬師から槍へ

二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

雪山のたのしみ

スキーの思い出

妻に捧ぐ

秋の穂高・槍

冬山の独り歩き

スキー三十年

ふるさとの山

家族登山

夏山へのいざない

あとがき

わが愛する山々……………

一六

笠ヶ岳

一七

雨飾山

一八

雲取山

一九

剣山

二〇

九重山

二一

あ と が ぎ	安 達 太 良 山	早 池 峰 山	火 打 山	聖 岳	皇 海 山	恵 那 山	守 門 山	大 台 ヶ 原 山	笊 ヶ 岳	天 城 山	御 座 山	後 方 羊 蹄 山	羅 臼 岳	阿 寒 岳	斜 里 岳	武 尊 山
------------------	-----------------------	------------------	-------------	--------	-------------	-------------	-------------	-----------------------	-------------	-------------	-------------	-----------------------	-------------	-------------	-------------	-------------

三 四	三 六	三 八	三 〇	三 一	三 三	三 五	三 七	三 九	四 〇	四 一	四 二	四 三	四 四	四 五	四 六	四 七
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

I

北海道の山旅	三三
親不知・子不知	三三
神流川を遡って	三三
梅ヶ島温泉	三三
瑞牆山	三三
草津白根	三三
雨の徳本峠	三三
夏の蔵王	三三
白峰三山	三三
大菩薩峠	三三
乳頭山	三三
父不見山	三三
奥吉野の隠し平	三三

四阿山

四一四

Ⅱ

峠いろいろ

四一〇

北に遠ざかりて雪白き山あり

四一七

山のレパートリイ

四一九

登山家という人種

四二二

パラレルよ、さらば

四二七

登山と年齢

四三九

旧式登山者

四四三

姪と共に

四四四

山と遭難

四五三

あとがき

四五六

深田久彌・人と作品(三)

近藤 信行…… 四五九

解題

中馬 敏隆…… 四六八

山
て
お
お
お
お

湯沢の一年

都会にいと、山に近い住人はいつでも山に行けてさぞいいだろうと羨ましがすが、さて実際に山近くに住んでみると、考えていたほど山に行けるものではない。朝夕山を眺めているので、いくらかそれで登高欲が充たされるのかもしれない。それにいつでも行けるといふ気が、かえって行かせないことになる。

終戦翌年の夏、華中から復員してきて、越後湯沢に仮の住居を定めた時、周囲の山々を眺め、まるで宝の山にでも入ったように狂喜したものだ。簡単に行って来られる山々がいくらでもある！ そのうちボツボツとみんな登ってやろう！

戦争で心身が疲れていたのと、このあたりの中級山岳の夏の登山のしんどさを思って、暑中はおつばら近郊散策程度に留めていた。秋にでもなつたら！ ところがそ

の秋が来ても、天気が悪かったり仕事に追われたりで、なかなか山へ行く暇が見出されない。そのうちだんだん山が紅葉してきて、うっかりしていると冬が訪れて来そうになった。

清水トンネルを抜けたところにある越後湯沢は、温泉やスキーで御存じの方が多いと思う。魚野川（下流で信濃川に合する）に沿うてわずかばかりひらけた谷間で、両側は鼻の先に山が突っ立っている。上流の方を眺めると、上越国境の山々がそれぞれの形で連なっている。少し高い所へ上ると、大源太山から万太郎・仙ノ倉山まで一望のうちに収めることが出来る。さらに高い所へ上ると、前山の頭を越えて、巻機山から笠ヶ岳に到る連嶺も視界に入ってくる。これらの山々に登る恰好な足溜まりとして、湯沢に住むことは都会の人たちに羨まれるに違いない。

僕も湯沢に移った当時は、貪食漢が御馳走を前にして舌なめずりするような欲望を感じたものだが、実際は一年余りの滞在間に数えるほどしか登ることが出来なかった。そして今、北陸の海に近い平地の町に転じて、惜しいことをしたと口惜しがっている始末である。

まず手近な山から順番に征伐して行くつもりで、八月の末、眼の前に立っている飯士山に登ってみることにした。この山はスキーで岩原に行かれたことのある人は御存じの通り、岩原スキー場を一番上まで詰めて行った所に尖っている山である。清水トンネルを魚野川の谷に出ると、否応なしに真正面にこの山が眼に入る。ピラミッド型の形のいい山で、その向かって左の尾根に、牙を立てたように四つほど岩峰が突っ立っているので直ぐに分かる。一名上田富士と言われているが、いくらか富士山型に見えるのは、魚野川の谷をもっと下って、この山を振り返るような位置からである。

飯士山は標高一二二メートル、湯沢が約三〇〇メートルくらいだから差引き八〇〇メートルの高さが、つい鼻の先に立っているわけである。こう山が近いと、登山と言うより遊山と言いたくなる。僕は同宿の義弟と朝飯をすますと、すこぶる気楽な気持ちで出かけた。おそくても正午ちょっと過ぎには戻れるつもりで、大した弁当の用意もして行かなかった。最も手っ取り早く山に取りつくつもりで、村を出て魚野川を徒歩で渡ると、すぐそこからアナ沢（飯士山の西南に出ている沢）を上り始めた。

沢に沿って始め山仕事の小径があったが、それがなくなって傾斜がグッと急になってきた。この沢を突きとめて行けば、飯士山の西へ出た尾根の鞍部に出るはずである。かなり上まで登って、二つに分かれた沢を、左の方が通り易そうなのでそれを登ったところ、鞍部より西に寄った高みへ出て、少し損をした。ガラガラの水で足が滑りそうで、やっと物につかまって匍い上がるような急さであった。

尾根へ出てみるとひどい藪で、十歩と案に歩けるところがない。例の牙を立てたような四つの岩峰を一つ一つ越えて行くのだが、藪を掻き分け藪の上を踏んで行くので、ほとんど地面に足の着いたことがないような始末だった。途中灌木の枝にブラ下がついていた蜂の巣に触れて手の甲を痛い針に刺されたりして、久しぶりに藪潜りの苦勞と快味（？）とを味わった。

こんな予想外の妨害に暇取って、頂上の南のコブ（一四〇メートルの圈）に着いた時は、もうとくに正午を過ぎていた。このコブは岩原からの登山道にあたっていたのでそこからは道があった。もつとも戦争中手入れする人もなかったとみえて、ともすれば見失いそうな跡跡

程度である。頂上間際の急坂を登り切って、三角点のあ
る狭い頂へ出た。

あいにく曇っていて西南の方の国境の山々は見えな
かったが、東北の方、利根水源の山々を望み得たのは倖せ
であった。手軽な山とは言え、復員後始めて千メートル
以上に立ったのである。さすがに登頂の喜びは抑えがた
い。「世が世なら、ここでテレモスの紅茶か、パイ罐で
もあけるところだが——」などと言いながら、貧弱な餌
を食べてから下山の途についた。

南のコブまで返し、それからさっきの岩峰の尾根でな
く、今度はさらに南へ延びた尾根の踏跡を辿った。その
尾根を下り尽くすと岩原スキー場のてっぺんの三角形の
頂点に出る。僕等はその広っぱを足の出まかせに下って
行った。スキーハウス（後記、その当時は進駐軍に接収
されていた）の横を大きな老いぼれ犬に吠えられながら
通りすぎ、台地の縁の坂を下れば、もうあと湯沢まで一
里となし。時節柄途中の百姓家でジャガイモを買いこん
で、四時頃ベコベコの腹で宿に帰った。

その次に、やはり義弟と二人、今度は蓬峠（よもぎ
ど）を越えてみ
ようということになった。土樽から蓬沢を上って峠を越

えて、上州の湯松曾川（ゆづせ）に出ようというのである。ところがこの蓬沢の道は、地図には点線路で出ているが、今はどうなっているか土地の人に訊いてみるが、誰も確かなことは知らない。たぶん荒廃して歩けまいというくらい
の返事である（清水トンネルが通じてからこんな道を歩くのは、本当の山好きだけである）。道のない沢を溯行し
ようなんて苦勞はあまりしなかったもので、その方は
あきらめて、上州側の土合（どあい）から峠へ登り、そこから七ッ
小屋山へ行き、清水峠へ出て、また土合へ戻って来よう
ということになった。それなら前に一度行ったことがあ
り気が楽である。

十月初旬のある日、朝焼けで東の空が赤い。よく晴れ
ている。熱い芋粥（いもがゆ）をすすって、早朝宿を出る。一番の汽
車で土合に着いたのは七時前だった。何年ぶりで湯松曾
川の谷に入る。始めトロツコのレールがついていたり、
ダムが出来ていたりして、感じが悪かったが、マチガ沢
まで来るとレールもなくなり、清潔な湯松曾川の本然に
返ってきた。一ノ倉沢。一週間ほど前にこの岩壁でま
たしても誰か遭難して死んだことが新聞に出ていた。お
そらく日本で一番多くの登山者の犠牲を出したところ

あろう。そこを過ぎて、次に幽ノ沢、芝倉沢。いずれも沢の奥に鋼鉄のような岩壁を見ながら行くこの道は、まことに楽しく興趣深い。大きな栃の木の下を行ったり、カニコウモリの群落を見たりして、九時に武能沢に着いた。

以前ここに東京鉄道局で作った気持ちのいい山小屋があった、僕も再三御厄介になったことがあったが、一九四〇年の一月に雪崩のため潰れてしまった（その詳細は雑誌『山と溪谷』第六十号に新谷茂氏が書いていられる）。今はその礎のコンクリートだけが残っていて、その間にはおずきなど咲いているのも哀れであった。礎によって昔の建物の構造が窺われ、懐旧の情が湧いてくる。二人はそこに腰を下ろして、芋と握り飯を一つずつ食べた。

「湯沢」五万分ノ一の旧版には、武能沢の下に家屋の記号が二つあって、武能という地名が記入されている。昔の清水越の茶屋でもあったのか、それとも出作りの小屋でもあったのか。武田久吉博士の言の通り、ブナウは撫生であつて、武能は宛て字である。蒲生、柳生、荻生などのように、撫生というのは撫がたぐさん生えているところからきた地名で、いかにもこのあたりを適切に表現

している。こういう名前は復活して残しておきたいものである。

地名に触れたついでに、僕の発見の一つ書き加えておこう。湯松曾の谷のつきあたりに頑張っている、蜂の長い七ッ小屋山、という奇妙な名前はどこから来たかということである。角田吉夫氏の『上越國境』という本は、この方面の山をもっとも早く紹介した、かつて僕にとつては大へん参考になった本だが（今こそたくさんの案内書が出ているが、この本は昭和六年の発行で、一地方のまとまった山の紹介書としては、初期に近いものだろう）その中に、次のような条がある。「七ッ小屋山は、又、シシ小屋の山名があり、嘗ては附近に羚羊を追ふ獵師小屋の存在によつてその名があると聞く」。近頃よく調べられた山の地図によると、七ッ小屋の西にあたる一四七二メートルの三角点に、シシゴヤノ頭という名前が付せられている。どちらが本来のシシゴヤであるべきかは問題として、七ッ小屋という名はおそらく、シシ小屋がシチ小屋と聞き誤られ、そのシチ（七）がさらに七ッという語に化けたのであらうと想像する。とすれば、七ッ小屋はシシ小屋と同じことになる。誰かが簡単に七